

「貴方らしい生活ができましたか？」

グループホーム花みずき

九合 るり子

認知症の方のためのグループホーム『花みずき』が平成13年11月にオープンして5年6ヶ月が経ちました。

そんな中、ユニット“ふじ”で1月にお二人の利用者さんが亡くなりました。高齢ということもあって、体調をくずされてからあつという間の事でした。お二人同時進行のターミナルケアとなりましたが、ベッドに伏せられた期間、お一人の方は3日、もうお一人の方は約一日と短いものでした。今回は、約4年間スタッフの一員のようにいつもお手伝いをして下さっていた、Aさんの生活の様子を紹介させていただきます。

Aさん男性 大正9年生まれ(85歳) 要介護度:3 妻死別 子供2人

国鉄退職後は、将棋クラブで活動され、かなりの腕前のような様子でした。奥さんと死別後、長男夫婦と同居していましたが、Aさんの異変に気づき、平成11年10月高齢者脳機能センター受診し、アルツハイマー型認知症と診断されました。その3年後の平成14年3月2日、Aさんご家族に付き添われ、『花みずき』に入居となりました。

左耳が全く聞こえないことと、血圧が時々高くなること以外、身体的には問題なくとてもお元気で全て自立していました。しかし、ご家族にはひとつだけ心配されていたことがあり、Aさんはタバコを吸われる方だったので、入居してから我慢して生活できるかどうかということでした。グループホームでは出火の危険性を考えて、禁煙なのです。入居されたAさんは、その日からタバコの売店や自動販売機を探して『花みずき』内を1日何往復もされるようになりました。スタッフはAさんが混乱されないように、タバコのかわりにアメをなめて頂いたり、大好きなコーヒーを飲んで頂いたり、統一した声かけや対策を考えながら接するようになりました。タバコ探し同様、帰宅願望も強く入居して1ヶ月間は、「家族が心配しているだろうから、連絡したい」と言われ、公衆電話を探しうろうろされていました。夕方になると、更に徘徊は多くなり、「帰る」という訴えが激しくなってきました。足も丈夫で階段も二段とびで昇られたり、時にはエレベーターを使用されることもあって、常にAさんが何処におられるか把握しているつもりでも、いつのまにかお一人で駐車場の辺りまで行かれていることもありました。

徘徊が始まるとご家族はAさんがここに泊まることを知っていることや、連絡はしてあること、夕ご飯を作ったから一緒に食べましょう、などと何度でも繰り返し返答していきました。1ヶ月過ぎた頃、Aさんは「ここに泊めてもらっていいかなあ…」と初めて言葉に出して下さり、少しずつ馴染んでこられたことを感じました。

落ち着かない時には、お手伝いをお願いすると、「よっしゃ」ととてもいい返事で引き受けて下さいました。洗濯物干し、洗濯物たたみ、掃除、料理、食器すすぎや食器拭きと、出来ないことはないくら

い何でも丁寧にして下さいました。特に、洗濯物は「これはわしの仕事だから」と、ベランダに出て行かれては早く乾くように、陽のあたる場所に移していました。乾いた物から取り込まれ、スタッフが顔負けするくらい一枚ずつしわを伸ばし、きれいにたたまれていました。まだ乾いていない洗濯物を取り込まれる場合、そのままご自分の居室に運ぼうとされていたり、いつのまにか室内物干しを持ち帰られているのを見ると、笑わずには居られませんでした。

ある日、Aさんの居室を開けると洗濯物がかかったハンガーを壁にずらりと並べて干しておられ、びっくりしましたが、その後も何度も同じ行動をされるようになり、その光景をみても驚かなくなりしました。Aさんは利用者さんと過ごす時間よりスタッフと常に行動していたように思います。スタッフをいつも気遣って下さり、「たいへんやな、何か手伝おか」「いつでもいってよ」。これが、Aさんの口癖でした。

入所当初の頃ですが、「何かお手伝いは…」とお願いするのでカーテン閉めをお願いしました。ホールと北側の窓だけでよかったのですが、Aさんは各居室の鍵の点検とカーテン閉めまでもして下さいました。その後、どこにも姿がみえないので探していると他のユニットにまで行き、カーテンを閉めて回っておられました。この時からお願いする際には、“ふじ”のユニットだけでいいことを伝える事としました。Aさんは物忘れがありましたが、その当時、理解力は確かでした。スタッフと行動を共にしていたこともあったためか、スタッフが何か使った居室の鍵を開閉していることに気づかれたようでした。その後ご自分でもコインを使って居室に鍵をかけられるようになりました。

毎日のように入浴されるAさんは、入浴前必ずとっていいほど、時計や財布を居室内のどこかにしまい込んでから行かれていました。取り込み癖もあって、この時とばかり、クローゼット、三段ボックス内より、いろいろな物が見つかりました。その時には、Aさんも一緒であるため、引き上げる事はしないで、入浴時、外出時、ホールにおられない時、そっと引き上げるように配慮しました。

共同生活をしているうえで、どうしても利用者さん同士のトラブルは切り離す事は出来ませんでした。

認知症のレベルも、人それぞれ違うため、意味不明な行動をしていると注意したり、また、ゆっくりとお手伝いして下さっている利用者さんとは動くペースが違いイライラされることもありました。スタッフの行動をみていたAさんは、利用者さんがスタッフを困らせていると思うと、すぐに寄ってきて助けようとして下さいました。しかし、何分か後には何もなかったように、一緒にお茶を飲まれて穏やかなひとときを取り戻す事となりました。

Aさんは日中、新聞・小説・日記を読んで過ごされるのも日課でした。一番好きなことは将棋をする事でした。1日に何局でも打たれることもあるのですが、将棋を始めるたび「せんどぶりやー」と笑顔で言われていました。かなりの腕前のように、ユニットの利用者さんと勝負されても少し物足りなかったようでした。

また、ご家族が面会に来て下さった時には、いつもスタッフに見せて下さる笑顔とは少し違っていました。帰られる時には、必ず玄関まで見送りに行かれて“ふじ”に戻られると2階のベランダから手を振って見送られていました。うれしそうな笑顔を見ると、この笑顔は、スタッフがいくら頑張っても見せてはもらえないと痛感させられる一瞬でもあり、私たちまでうれしく思える一時でもありました。予想が付かないような出来事が起こったりする中で、Aさんは毎日役割を持ちながらマイペースで過ごされる日々が続きました。

何事もなく過ごされていたAさんにも病院受診しなくてはならないことが起こりました。平成15年6

月には、入居当初より2倍くらい大きくなっていった右頬のホクロを取ってしまいたいと希望されたこともあって、聖マリア病院皮膚科受診し、7月18日ホクロ摘出手術となりました。約一時間で無事終了しました。傷口がきれいに治った頃には、ホクロがあったことも忘れられていました。

6月頃から下痢も続いてきたため、6月中旬聖マリア病院内科受診し、9月3日には、内視鏡検査食を食べて、ラキソセリン服用して頂き、9月4日、朝・昼食絶食し、腸管洗浄剤を1.8lの水で溶かし、一時間以内に飲用してからの受診になりました。診察の結果、ポリープ1cmの物が2つ、5mmの物が1つ見つかりましたが、良性ということもあり、手術はしないことになりました。下痢は体質的なものからきているということでした。

平成17年2月のことでした。Aさんの兄嫁さんが踊りをされていて他の施設にもボランティアでいかれることがあるということで、『花みずき』でもお願いすることになりました。10名くらいの方が来て下さり、衣装を着て踊って下さいました。終わると、コーヒーとケーキを食べながら談話されて楽しい一時を過ごすことができました。

Aさんの知っている方もいらしゃったようで、目を細めて嬉しそうにみられては感無量になり、泣きそうになられる場面もあったようです。

平成17年頃から少しずつ身体面にも衰えがみられるようになりました。長時間歩くことが出来なくなってきて、何度も休息をとりながらの散歩にもなりました。朝はお元気で動かれていても、夕方になるとしんどいと訴えられる日が多くなってきました。早起きされて毎朝して下さっていたカーテン開けや布巾たたみも、いつの日か他の利用者さんと交代することとなりました。食欲の低下によって体重も徐々に減ってきました。歯ぐきも痩せてきて義歯の調整も必要になって歯科受診しましたが、上あごがえぐれたようになっていたこともあって、これ以上の調整は不可能ということでした。以前と同様で、ポリグリップを使用して固定することしか方法はないこともわかりました。

7月に入ると1日に何度も他のユニットや1階まで行かれるようになりました。フラフラ状態と前傾姿勢で歩かれるために、スタッフは共に行動して転倒されないように気をつけるようにしました。

Aさんも入居当初から排泄の失敗はありましたが、失敗するとご自分で衣類の交換をして、クローゼットの中に干してあったり、丸めて隠してありました。濡れたズボンは陽があたるベッド側に干して乾かしてあったので、点検させて頂いてお預かりするようになり、尿汚染がある時には、声をかけて着替えて頂いていました。失禁の回数が増えて、更衣だけでは間に合わなくなってきたので、尿取りパットを使用することにしましたが、当然Aさんはパットがどんな物で、どんな役目をする物なのか知りませんでした。その都度パットの説明や確認をさせて頂きました。ご自分で外してあったり、パンツとパッチの間につけていたり理解するまで時間がかかりました。トイレも洋式に誘導するようになっていましたが、便座に座ることが理解できなくなってきたり、トイレの場所やご自分の居室もわからなくなってきたり、他の居室を開けてしまうこともありました。

この頃になると理解力の低下や意味不明なことも言われるようになりました。混乱してきたり、不安になられている時にはAさんの側にいてゆっくりお話を聞くようにしました。

8月になると食事もうを喉を通らなくなってきました。食事時のむせこみや、痰のからみがあって、体力的にもご自分で痰を切って吐き出せないことや、夕方になると熱が上がってくる状態など、すべてクリニックのドクターに報告し指示を頂くようにしました。スタッフ間も注意する点や状況は連絡ノートに書いたり、口頭で伝えていきました。

8月23日、マリア病院内科受診し、誤嚥性肺炎の疑いがあるということでした。「ベッドで安静にして、移動する時は車椅子を使用して、食事も居室で摂った方がいいでしょう」と指示を頂きましたが、どんな状態になられても、「大丈夫」とご自分で動いてホールに来られたり、尿意があるためにトイレまで歩いて行こうとされました。スタッフは動かれるAさんに付き添って転倒しないように気をつけるしかありませんでした。

8月25日夜間、1時50分息が荒くなり呼吸するのも苦しうになって血圧も測れない状態になりました。大頭先生や施設長に状況報告しました。ご家族にも先生から連絡をすることになりましたが、この時は朝方には状態も安定し落ち着かれました。先生とご家族は今まで何度も話し合いが行われていましたが、再度確認することになって入院はしないでここで最後までということが決まったようでした。私たちはこの日からターミナルケアということ意識しながらの介護が始まりました。発作が起こった時にはどのような手順でおこなっていくか、スタッフはもう一度確認することにしました。

9月6日にマリア病院受診するとCT撮影で右肺に悪性腫瘍2cmのものが見つかりましたが高齢ということもあって、処置はしないでこのまま様子を見ることになりました。ご家族は呼吸するにも苦しうで、痰のからみもあったので少しでも楽になるなら吸入して欲しいと先生に相談されて吸入器を使用することになりました。朝、夕2回、10分間の吸入をするだけでも随分楽になりました。食事もしょこつ摂れるようになって、体調も徐々に回復してこられました。辛そうにされていても居室で休まれようとされずに「ここでええわ」とテーブル席で過ごされましたが、居眠りが始まると危ないのでソファに移って頂くようにしました。

9月下旬には、荷造りされたり、タバコの売店を探されるほどの回復ぶりに驚きました。面会に来て下さるとトイレ誘導に食事介助、そして散歩と協力して下さって、ご家族と一緒に過ごされている時間は、私たちも安心できました。どんな状況であっても尿意があるうちは、ご自分でと思われるでしょう。トイレに行こうとされていましたが、何度も転倒しうになっています。夜間はAさんの様子がいつでもわかるように居室のドアを全開にしておくことにしました。

12月に入ると居眠りしている時間が増えてきて、しんどい時にはご自分から居室に戻って休まれるようにもなりました。少し体調がよくなると洗濯物をたたもうとして下さるので、「私たちがしますから」と伝えると「大丈夫や」といって手伝って下さる時もありました。ある日、食器拭きをしていると台所まで来られて「これがわしの仕事やからな」と笑いながら手伝って下さるAさんをみていると体調が悪くてもご自分の仕事、役割として思われていることに私たちは複雑な気持ちになりました。スタッフにも「すまんな」「ご苦労さん」「ありがとう」「いつもお世話になって…」と感謝して涙ぐまれるようにもなりました。

1月になると食事量もかなり減ってきました。食べられない時にはAさんの好きな物や栄養補助食品などを食べて頂くようにしました。食事時になると目を閉じて辛そうにされていて、薬もつぶしてヨーグルトに混ぜて服んでもらわなければいけませんでした。

1月19日ご家族の立ち会いの下、介護保険の訪問調査が始まりましたが、ご自分の名前も答えることができず、調査員が質問することも理解できなくなっていました。ただご自分が話したいことのみ涙を浮かべながら喋られるだけでした。

この頃から立ち上がることが出来ないこともあって、車椅子を使用したり、2人介助で行うようになってきました。ご家族も心配されて毎日のように連絡してこられました。スタッフも変化があるとすぐ

状況をお伝えするようにしました。Aさんは辛くても、しんどくても居室で休むことをいやがられるようになってきて、洋式トイレの誘導も強く拒むようになりました。

1月29日には、ご家族が親戚の方と面会に来られました。Aさんはたいへん喜ばれて居室で楽しく過ごされました。

1月30日朝から食事も摂れない状態になりました。高い熱が続いていることもあって体に痛みもありました。Aさんと呼んでみると「はい」としっかり返事をして下さいましたが、口からの水分補給もほとんど摂れなくなってきて、舌の乾きがみられるようになりました。

20時00分 Aさんは静かに永眠されました。

長時間ベッドで伏せられることなく、亡くなる前日まで皆さんと一緒に普通に生活して、最期までご自分の出来ることは、ご自分でされていました。また、ご家族の協力があったからこそ出来たターミナルケアでした。ご協力下さったことに感謝いたします。

この4年間でしっかりご自分の居場所もつくり、その人らしい生活を過ごすことができた、Aさんのお話を紹介させて頂きました。